

## 外科領域におけるloracarbefの臨床的検討

山本 博・志村秀彦

福岡大学第一外科\*

新しいカルバセフェム系抗生剤であるloracarbefを外科領域感染症に投与し、以下の成績を得た。本剤を瘻1例、蜂巣炎2例、感染性粉瘤2例、肛門周囲膿瘍1例の合計6例に使用した。投与方法は1回200mg 1日2～3回とし、投与期間は5～7日間であった。臨床効果は著効2例、有効2例、やや有効1例、無効1例であった。本剤によると思われる軽度の手指のしびれが1例にみられた。臨床検査値の異常は認められなかった。

**Key words:** loracarbef, 外科領域感染症

Loracarbef(LCBF)は協和醸酵工業(株)で創製された経口用カルバセフェム剤で、従来のセフェム系抗生物質と比較して、その化学構造の特異性が大きな特徴である。すなわち、LCBFは既存のセフェム骨格の1位の硫黄が炭素に置き換わったカルバセフェム骨格の $\beta$ -lactam系抗生物質である。LCBFは3位と7位にcefaclor(CCL)と同一の側鎖を有し、CCLに近似した化学構造を有している。

*Staphylococcus aureus*, *Staphylococcus epidermidis*, *Streptococcus pyogenes*, *Streptococcus pneumoniae*, *Escherichia coli*, *Klebsiella pneumoniae*, *Proteus mirabilis*, *Haemophilus influenzae*および*Propionibacterium acnes*等のグラム陽性菌、グラム陰性菌に抗菌力を有している。

健常成人男子にLCBF 200mgを食前経口投与した時の血漿中濃度は $C_{max}7.44 \mu\text{g/ml}$ ,  $T_{1/2} 1.17\text{h}$ ,  $AUC14.6 \mu\text{g}\cdot\text{h/ml}$ で推移し、投与8時間までに90%以上が未変化体として尿中に排泄された<sup>1)</sup>。

今回我々は、LCBFを外科領域感染症6例に投与し、臨床効果と安全性について検討したのでその成績を報告する。

対象は、1991年5月から1992年2月までに、当科に外来通院し、試験参加の同意が得られた外科感染症6例である。その内訳は瘻1例、蜂巣炎2例、感染性粉瘤2例、肛門周囲膿瘍1例である。男性3例、女性3例で、年齢は18歳から68歳であった。LCBFの投与方法は1回200mg 1日2～3回経口投与した。投与期間は5日から7日であった。他の抗菌剤など臨床効果の判定に影響を与える可能性がある薬剤との併用は行われていない。

臨床効果の判定は、下の如き判定基準によって著効

(excellent), 有効(good), やや有効(fair), 無効(poor)の4段階の判定とした。安全性は随伴症状および臨床検査値の推移から判定した。

著効: 自覚的所見の消失, 他覚的所見の正常化および起炎菌の陰性化のいずれもが5日以内に認められた場合

有効: 上記3項目のうち2項目に改善あるいは正常化, 陰性化が5日以内にみられた場合

やや有効: 上記3項目のうち1項目に改善, 正常化, 陰性化が5日以内にみられた場合

無効: 上記3項目のいずれにも改善がみられず, または増悪した場合

Table 1に症例別臨床成績の要約を示した。その結果, 著効2例, 有効2例, やや有効1例, 無効1例であった。

症例1 18歳, 女, 瘻: 一週間前より下腹部の圧痛, 硬結に気づき, 次第に増強するため当科受診。発赤, 腫脹, 硬結, 疼痛, 熱感を認め, 瘻と診断。LCBFを1回200mg, 1日2回, 5日間投与。臨床症状はすべて消失し, 著効と判定した。

症例2 68歳, 男, 蜂巣炎: 約一週間前より陰嚢部の疼痛を来し, 次第に増強し, びまん性に発赤, 腫脹を認め, 当科受診。硬結も認められ, 蜂巣炎と診断しLCBFを1回200mg, 1日2回, 7日間投与した。投与5日目に発赤, 硬結, 疼痛の軽快は認められたが, 腫脹は不変のため, 穿刺の処置をほどこしたところ, 投与終了時には臨床症状はほぼ消失し, やや有効と判定した。

症例3 45歳, 女, 蜂巣炎: 5日前より臍上部に発赤, 腫脹をきたし, 当科受診。硬結, 疼痛, 熱感を認め, 蜂巣炎と診断。LCBF1回200mg, 1日3回, 6日間

Table 1. Summary of patients treated with loracarbef

No.	Age, Sex (yr)	Diagnosis underlying disease & complication	Administration			Isolates*	Efficacy		Side effects
			daily dose (mg × times)	duration (days)	total dose (g)		bacterio- logical	clinical	
1	18, F	furuncle (-)	200 × 2	5	2.0	(-) (-)	unknown	excellent	none
2	68, M	cellulitis (-)	200 × 2	7	2.8	(-) no growth	unknown	fair	none
3	45, F	cellulitis (-)	200 × 3	6	3.6	(-) (-)	unknown	good	numbness of fingers
4	54, M	infectious atheroma (-)	200 × 2	7	2.8	(-) <i>Peptostreptococcus magnus</i>	unknown	good	none
5	38, F	infectious atheroma (-)	200 × 2	7	2.8	(-) (-)	unknown	poor	none
6	36, M	periproctal abscess (-)	200 × 3	5	3.0	(-) (-)	unknown	excellent	none

\* Before  
After

Table 2. Laboratory findings before and after loracarbef treatment

No.	RBC (×10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup> )	Hb (g/dl)	Ht (%)	WBC (/mm <sup>3</sup> )	Eosino (%)	Platelets (×10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup> )	S-GOT (μ/l)	S-GPT (μ/l)	ALP (IU)	BUN (mg/dl)	S-Cr (mg/dl)	CRP
3	B 447	12.9	39.5	10800	3	31.0	16	26	119	11	0.4	1.1
	A NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT	NT
5	B 398	12.0	36.0	5200	2	24.7	25	21	130	12	0.4	(-)
	A 404	12.4	38.1	3500	7	21.7	19	7	113	11	0.5	(-)

B: before treatment A: after treatment NT: not tested

投与したところ、臨床症状はすべて消失し、有効と判定した。本剤投与開始日夕方から右手第4、5指にしびれ感をきたしたが、脱力は認めず、症状軽度のため、服薬継続した。服薬終了後しびれ感は少しずつ軽くなったが、20日間ほど残存した。

症例4 54歳、男、感染性粉瘤：2ヵ月前に右背部に小結節を認めたが放置、2日前より同部に疼痛をきたし受診。5×3cmの硬結、4×3cmの発赤あり感染性粉瘤と診断。LCBFを1回200mg、1日2回、7日間投与したところ発赤、腫脹限局化し、症状軽減したので、有効と判定した。

症例5 38歳、女、感染性粉瘤：1年前に右鼠径部に小豆大の硬結に気付くが放置。数日前から増大し、2日前から発赤、疼痛、腫脹等を生じ、更に増大し当科受診。感染性粉瘤と診断し、LCBFを1回200mg、1日2回、7日間投与した。発赤、腫脹更に増大し、無効と判定した。

症例6 36歳、男、肛門周囲膿瘍：2日前より肛門部に疼痛をきたし増強する。大豆大の有痛性硬結を認め、肛門周囲膿瘍と診断し、LCBF 1回200mg、1日3回、5日間投与した。硬結は消失し、発赤、疼痛ともに著明に軽快し、著効と判定した。

投与前の細菌学的検索では各症例とも菌は分離されなかった。

副作用としては、軽度の手指のしびれ感が1例に認められた。

投与前後に臨床検査値を検討できた1例では臨床検査値の異常変動はみられなかった(Table 2)。

以上、新しく開発された経口カルバセフェム系抗生物質LCBFを外科領域感染症6例に対して使用し、臨床効果と安全性について検討を行った結果を報告した。6例中4例の有効症例数は軽症の感染症であることを考えると少ないと思われるが、有用性の判断には更に症例数を重ねることが必要であろう。

## 文 献

1) 大森弘之, 原 耕平: 第40回日本化学療法学

会西日本支部総会, 新薬シンポジウム。  
KT3777, 岡山, 1992.

### Clinical study of loracarbef in the surgical field

Hiroshi Yamamoto and Hidehiko Shimura

First Department of Surgery, School of Medicine, Fukuoka University

7-45-1 Nanakuma, Jounan-ku, Fukuoka 814-01, Japan

We conducted a clinical study of loracarbef (LCBF), a new carbacephem antibiotic, in the surgical field. LCBF was administered to 6 patients (one with furuncle, two with cellulitis, two with infectious atheroma and one with periproctal abscess), at a daily dose 400 mg or 600 mg for 5~7 days.

Clinical efficacy was excellent in 2 patients, good in 2, fair in 1 and poor in 1.

As side effects, slight numbness of the fingers was observed in one patient. No abnormal laboratory findings were observed.